

【一】 次の文章は山本周五郎「内蔵允留守」の一節である。岡田虎之助は別所内蔵允の弟子になろうと江戸に来たが、内蔵允は長い間家を空けていることが分かった。そのため虎之助は近所の閑右衛門老人の家で農業を手伝いながら帰りを待つこととした。以下の文章をよく読み、後の設問に答えなさい。

その明るる早朝であった。声高な人の話し声に眼を覚まされた虎之助は、声の主が別所家の留守宅の弥助老人だと分つたので、急いで着替えをして出た。もしかすると内蔵允のシヨウソクがあつたのかも知れない、そう思ったのである。手早く洗面を済ませて戻ると閑右衛門が独りエンガワで茶を啜っていた。

「お早うございます、いま弥助どのが見えていたのではありませんか」

「いま帰ってゆきました」老人は可笑しそうに喉で笑った、「……面白い話を聞きましたよ、お留守宅にいたあの浪人共が、ゆうべ夜中に銭を掠って逃げたということでございます」

「……銭を掠って」虎之助はAをひそめた。

「留守中に修業者が来て、路用に困る者があつたら自由に持たせてやれと、通宝銭がひと箱置いてあつたのです、今日まで一文も手を付けた者は無かつたのですが、あのや、まだ、共、それを掠って逃げたのだそうでございます」

「なんと、見下げ果てたことを」

「いや、あれがこの頃の流行でございますよ」老人は茶碗を下に置き、目を細めて栗林の方を見やりながら云つた、「別所先生を尋ねて来るお武家方で、本当に修業をしようという者がどれだけあるか、多くは先生から伝書を受け、それを持ってシユツセをしよう、教授になつて楽な世渡りをしよう、そういう方々ばかりです」

「それは先生が仰しゃつたのか」

「百姓にも百姓の眼がございます」老人は静かに片手で膝を撫でながら、「……たとえば岡田さま、貴方にお伺いたしますが、貴方さまはなんのために先生を尋ねておいでなさいました」

「それはもちろん、先生に道の極意をたずねたいためだ、刀法の秘奥を伝授して頂くためだ」

「ふしぎでございますな」老人は雲へ眼をやつた、「……私どもの百姓仕事は、何百年となく相伝している業でございます、よそ眼にはゾウサもないことのように見えますが、これにも農事としての極意がございます、土地を耕すにも作物を育てるにも、是れがこうだと、教えることのできない秘伝がございます、同じように耕し、同じ種を蒔き、同じようにBを折つても、農の極意を知る者と知らぬ者とは、作物の出来がまるで違つてくる、……どうしてそうなるのか、……口では申せませんが、また教えられて覚えるものでもございません、みんな自分の汗と経験とで会得するより他にないのでございます」

「岡田さまは若く……」と老人はひと息ついて続けた、「……力も私より何層倍かお有りなさる、けれども鍬を執つて大地を耕す段になると、貴方さまには失礼ながらこの老骨の半分もお出来なさらぬ、行つて御覧なさいまし、貴方さまが耕したところは、端の方からも草が生えだしています、渾身の力で打込んだ貴方さまの鍬は、その力にもかかわらず草の根を断ち切っていないのでございます、どうしてそうなるのか、どこが違うか、口で申せば容易いことでございます、けれど百姓はみな自分の汗と血とでそれを会得致します」

「……………」

「先日、岡田さまは私の言葉を咎めて、兵法は無用のものかと仰しゃいました」
老人は暫くして再び続けた。

「仰せの通りです、若し耕作の法を人の教えに頼るような百姓がいたら、それはまことの百姓ではありません、いづれの道にせよ極意を人から教えられたいと思うようでは、まことの道は会得できまいかと存じます。銭を掠って逃げたあの浪人共が、そのよいシヨウコではございませんか」

虎之助の背筋を火のようなものが走つた。

（山本周五郎「内蔵允留守」『深川安楽亭』新潮文庫、昭和四十八年 なお適宜ルビを補つた）

問五 傍線②「典型的状況を抽出する」とあるが、「状況」を抽出することによって過去はどのようなようになるのか本文中の言葉を用いて五〇字以内で説明しなさい（句読点などの記号も字数に含む）。

問六 筆者は過去の思想家から学ぶことによつてどのような意義があると考えているか、本文中の言葉を用いて五〇字以内で端的に答えなさい（句読点などの記号も字数に含む）。